よの上寺を登るにハあへこいまを足りりハ一文といくかゝらし
まの人にかりさぬ中しくハ「驛に樣の才ハ瘡よけて行らん
七八月かりいハいつ大瘡とかんに鼻かたく寺骨かりてまぬと
まらぬ志人（素らし）〳〵聖へし宿をりみし瘡のみ針抜
ある病に病ひうけ瘡のあへらい瘡の末うけらくよんすい笑
まらぬ瘡といいられらく乞もひらる鼻こる瘡いくまじやいと
海中らく海るかちの音の不川の浦うけらくお遠と少しり今
道之ハ妻さく斗や中らん壽かし嗚ハお江戸に拾るらん

七盃繽呑婆繪

酒くみ

「まつ人をまつにかぬ舌の根のとてりうかを者ハまうりの中へ「かくし
の心まで月うハまつて切つて刻し芥子ゆくまさひ醤油の
かかる香よへ「ゆかしき人も寄聖ハ酒やさかなに目をおく者
「いかり芥子ハまきしやといふて志へきる者ハなんかいな「公つ
らおいしき者のしてまいりハわさびの黄つけのこさかうハ酒
をのまず呑ぬけらく「見聖ハ樽あけて二つ三つの「呈にも酒の
入るや「酒ハ呑とつ樽ハ二つ三つのまれつを被をたうらまる
ハつづく比ハつ聖賢と酒に酔てそ「見るらしセハあかし酒や
呑あれ酒ハ吾まへ「聖よまつし足の中アまつし「尻を覚え
友よひあとるはかしのお多福ちりやちりしちをやしちり

ありもつて倒まさ姿の〽たてハまろびきつれにそろく床
の浦の之まろし須平立ゆうりてハ又もこそ御尾膳つゝく
〽盃おまはしあわの上つかしや〽さゝ月こそ今ハ他あるま皆
しく喰て〽よみくこそとき〳〵ついまろひ他の飲呑もかけいて
おもしなりにてきてしかすおく〳〵かへまきくをかけてと転む事も
なし〳〵〽加へいろ〳〵しのアゝ何志やゆうかけてなうさうてろふ
てやろうまきハまゆけをなかくひきゑつあん顔て〽居ようい
まて〽史をうのどうかわもしくとゆうく氷を呑しやしてくんでのこ
〽呑ふよ昼目ハそこあしろくおざんも人がせくなつく今ゆけま
すゝ黄より焼より一度出来るのが手川ふなかあて志んき
らしまへ〳〵〽麻をかけ白きつ玉のこゝろしうきさまなりん
こしてゆうの大おきくやさしつけろく〽もともふこゝろつおす
おじしあんもといころまたつろ包も包うく花見酒〽志るろ
しや〽いとゆかりく陽足元の〽膝のこ〳〵うけろく酒かとみえし
もけさ見まハ小肉あ見もや〽あるらんわちあしのしおく
びハ朝ふあるらん

酒九溜さ勤京役人首

変死眩暈

わきれさの酒井の縄の切るハゆう〳〵残子頭ハ瞼の寝つる